
鳳凰煉獄～焔の剣～

USAラビット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳳凰煉獄〜焔の剣〜

【Nコード】

N1438B

【作者名】

USAラビット

【あらすじ】

四人の青年達が繰り広げるドタバタファンタジーコメディアクション。彼らは仲間同士の絆で様々な出来事を乗り越える。そして、彼らは本当に倒すべき相手を見つけた。

第一記 悪夢の始まり（前書き）

表現方法が少し乏しいかも知れませんがよろしく。

第一記 悪夢の始まり

「……………ぐう」

布団にくるまっている黒に近い青髪の青年。

彼の名前はマスター。

右手には黒の、指先の出ている手袋をしている。

彼が心地良さそうに寝ていると、目覚ましがけたたましく電子音を鳴らし始めた

ジリリリリリ…バゴンッ！

「…朝からうるさい…」

かなり不機嫌な状態で目覚ましをチョップで止めた。

「ん~~~~~…」

彼は大きく伸びをした。

「…さっさと着替えるか」

そう言うとパジャマを適当に脱ぎ捨て、制服に着替えた。

すると…

チャーチャーチャチャー♪

朝から電話がかかってきたようだ。

「…もしもし？どちら様？」

電話の相手を確認する。

「今起きたのか？」

「何だよ。ロンか…」

電話の相手はロンだった。彼はマスターの親友であり、最高のライバルでもある、マスターにとっては掛け替えの無い親友だ。

「どうした？こんな朝から？」

「あのなあ…」

やれやれといった感じの声が聞こえてきた。

「時計確認したか？」

「…？」

現在：8時20分

学校到着：8時40分

つまり…

「早くしろよ？」

電話を切られた。

「…遅刻じゃあああっ！」

マスターはカバンを取り、大急ぎで学校に向かった。

第一記 悪夢の始まり（後書き）

かなり長い長編にする予定ですので、最後までお付き合いして頂ければ幸いです。

第一章 ある意味の悪夢（前書き）

キャラがいきなり増えましたのでセリフの前に名前書きしました。

第一章 ある意味の悪夢

朝の川原を猛ダッシュするマスター。

マスター

「進級初日から遅刻なんざ洒落になつとらんぞおっ！」

そんな事を叫びながら現在走ってます。

【…マスター…】

背後から名前を呼ぶ声が聞こえる。

マスター

「……………うげ！」

後ろを振り替えるとマウンテンバイクでこちらに突っ込んでくる一人の青年。

徐々に距離が縮まる。

そして……

ドカーンッ！

という音と共に跳ねとばされるマスター。倒れたマスターの側で自転車を止める青年。

???

「おっはよゝゝ元気か？」

悪びれた様子もなく聞いてくる。

彼はスロウド。マスターの友人である。

マスターと気が合うのか知らないが、二人はかなり仲が良い。
髪は金髪のはねっ毛。

スロウド

「聞いてるか？」

マスター

「……………」

返事をせずに倒れっぱなしのマスター。

スロウド

「…お…お…い…」

さすがにまずいと思ったのか、恐る恐る聞いてみる。
すると、

「……………い……………」

スロウド

「へ？」

ボソボソと何かを言っている。

突然立ち上がり

マスター

「痛いって！言っただろが！くおんの野郎！」

と、言いながらアッパーを顎に決めたマスター！。

スロウド

「ぶはあっ！！」

川原の土手に吹き飛ばすスロウド。

マスター

「つて！馬鹿に構ってる暇無いんだつた！」

吹き飛ばしたスロウドを置き去りにし、急いで学校へ行くマスター。

スロウド

「…おーい…俺は？」

自転車に押し潰されたままのスロウドが情けない声で助けを求めている。

しばらく走り、学校の校門が見えてきた。

まだ鐘は鳴っていない。

マスター

「いよっしゃ！？ギリギリセーフ！」

更に走る速度を上げる。

スロウド

「待てええいつ！」

背後から猛スピードで突っ込んでくるスロウド。

マスター

「ちいつ！？もう復活しやがったか！」

スロウド

「あの程度でえええつ！」

マスター

「…っ！しまった！」
追い抜かれてしまった。

……が、しかし校門を越えて、校庭の大体中心部辺りで彼はもの凄い土煙をあげながら転けた。

スロウド

「うばらあっぱっ！？」

よく判らない言語を発しながら転げ、動かなくなってしまった。

マスター

「……………」

大丈夫だろう、と思いつつも無視して校舎の中へ入るマスター。彼は自分のクラスを確認すると、遅刻ギリギリで教室に入った。

マスター

「危なかった〜」

ドアのすぐ側でへなへなと崩れるマスター。

???

「…ちっ…」

誰かが舌打ちをしたのが聞こえた。

マスター

「…なあ…ロイ？」

ロイ

「何だ？マスター？」

ロイと呼ばれた青年が不思議そうに返事をした。

ロイは黒のボサボサ髪。

性格は比較的無口で、かなりの本好き。

マスター

「何で舌打ち？」

ロイ

「遅刻したら面白いと思ったんだがな……」

マスター

「何でじゃっ！」

朝からマスターが教室で大声を出した。

???

「遅刻ギリギリじゃん……」

マスター

「……うわ……」

???

「人の顔見て、うわ……とか言っなよ!？」

彼はロン。

髪は碧のポニーテール。

真面目な性格のせいかは知らないが、教師のみならず、男女から頼りにされている。

ロン

「全くお前は……」

マスター

「朝からお前の説教は聞きたくない！」

ロン

「言われるような事をしてるからだろうが！」

マスター

「知るか！俺の私生活に文句言うな！」

……まあ、見ての通り。

二人は毎度毎度会ったたびに口喧嘩に発展する。

一見仲が悪いように見えるが、二人のコンビネーションは抜群だ。

スロウド

「おっはよう！皆の衆！」

スロウドが元気に教室に入ってきた。

スロウド

「……って、何？この雰囲気は……」

教室を包む一触即発の気まずい雰囲気。

原因はマスターとロンが口喧嘩の最中だったが、突然睨み合いに発展したからだ。

ロイ

「そろそろか……」

ロイがそう言った直後。

キンコーンカーンコーン♪

ちょうど良くチャイムが鳴った。

マスター

「…席に着くか…」

ロン

「そうだな…」

二人は大人しく席に着いたのだが…。

マスターの席はロンの横だった。

ちなみに窓際。

????

「皆、席に着いてる？」

教室に担任がのんびりした声と共に入ってきた。

マスター

「あれ？あの先生って…」

スロウド

「確か去年も俺らの担任だったよな…」
スロウドが気楽な声で答える。

???

「それじゃあ、皆？早く並んでー！」
のんびりした声で生徒達を廊下に誘導する担任。

彼女はシャルナ先生。

髪は薄いピンク。

性格は至ってのんびりしている。

そして、始業式…。

マスター

「……………ZZZ……………」

マスターが立つたまま器用に寝てた。

そして教室。

男1

「なあなあ、聞いてるか？あの噂…」

男2

「ああ、アレだろ？知ってる知ってる」

教室でクラスメイトが何やらヒソヒソと話している。

マスター

「何かあったわけ？」

マスターが聞いてみると、スロウド曰く、今日は転校生が三人来るらしい。

すぐにシャルナ先生が入ってきた。

男3

「先生ー！例の転校生はどこですかー？」

クラスメイトがすぐに聞いた。

シャルナ

「あらあら？このクラスは随分情報が早いですね？」
不思議そうにしている。

スロウド

「…実は情報流したの俺なんだよね…」
(ボソツ)

スロウドに肘打ちを入れておいたのは秘密だ。

シャルナ

「じゃあ、三人共々？入ってきて？」

ドアの向こうから可愛らしい返事が返ってきた。
そして、教室に入ってきた三人の転校生にクラスの男子達は目を奪われた。

《極上！》

男子達の心が一つになったのは今回が初めてだった。

シャルナ

「それじゃあ三人共々？自己紹介よろしくね？」

????

「あ、はい…」

一番教卓に近い女の子が緊張気味に自己紹介を始めた。

???

「ティナ・グラデイスです。皆さん、はじめまして」
可愛らしい声で自己紹介を始めた。

マスター

「……ティナ？」

マスターが名前を繰り返した。

???

「ティシャ・グラデイスです。よろしく」
名前からして姉妹という事が解る。

そして、最後の一人。

???

「リンファ・ハーベルグです。皆さん、これからよろしくお願いします」

元気に挨拶をした。

ロン

「……なあ……マスター……」

マスター

「何だ……ロン……」

ロン

「……最後の子……お前の妹か？」

実はマスターの下の名前はハーベルグ。

つまり…リンファという子はマスターの妹という事になるのだ。

マスター

「…んな訳あるか…」

ロン

「だよな…お前確か兄弟いないし…」

マスターは兄弟が居ないはずなのだ。

マスター

「いや、一人…確か、二人居た…」

ロン

「…下か？」

マスター

「上に二人だ…」

ロン

「…どっちにしろあの子にお前は見覚えが無いだろ？」

マスター

「…ああ」

力なく頷くマスター。

ふと、前を見ると、リンファが教室を見回している。

リンファ

「あ…」

マスターを見て、見つめるリンファ。

クラス

「……？」

自然とマスターに教室中の視線が集まる。

マスター

（何だ？）

すると、突然教室のドアが開いた。

現れたのは

……？

「よう。マスター！元気にしてるか？」
マスターの父親のロスカーだった。

マスター

「うおおおやああじいいつ！？」

ロスカー

「ん？…ぶはあっ！」

マスターのカバンがロスカーの顔面にクリーンヒットした。

すかさず詰め寄り、胸ぐらを掴み上げる。

マスター

「あの子について説明してくれるか？くそ親父」

ロスカー

「…うん、まあ。何だ、アレだ…」

マスター

「眼が泳いでないか？」

ロスカー

「……あ……。まあ、頑張れ！さらばっ！」
いつの間にか抜け出し、逃げていた。

マスター

「待ちやがれくそ親父……！！？」

だが、既に姿は無かった。

マスター

「くそっ！…仕留め損ねたか…」

ロン

「お前は自分の父親仕留めてどうする気だよ！」
すかさずロンがツツコミをいれてきた。

マスター

「平和を手に入れるつもりだったんだが？」

ロイ

「手に入るのか？それ…」

マスター

「全て親父が悪い！」

ロン

「よくわからん理由で父親を仕留めるな！」

マスター

「うる…」

スロウド

「はいはい、二人の喧嘩は終わりが無いからこれまでに…了解？」

マスター＆ロン

『……………』

バキッ！

スロウド

「おぶらっ！」

ロイ

「……ナイスコンビ……」

ロイの弦きが聞こえたが無視する。

自分の席に着こうとするマスターの袖を掴み、ティナが引き止めた。

マスター

「…何ですか？」

不機嫌そうに振り向く。

だが、彼女はひるむ事なくマスターの目をじっと見て一言。

ティナ

「久し振りだね♪マスター……」

嬉しそうにするティナ。

クラス

『……久し振り？』

その言葉にクラスメイト全員が疑問を浮かべた。

ロン

「あゝ…先生。質問宜しいでしょうか？」

ロンがシャルナ先生に質問をしようとしている。

ロン

「グレイデイスって…」

シャルナ

「先生も初め聞いた時は驚きましたゝゝ」

クラス

《絶対嘘だ！》

今度はクラス全員の心が一つになった。

ロン

「確か…キングの国のお姫様じゃあ……」

キング、世界最高と呼ばれている国王。

彼の国は完璧と名高い。その国には、国王、姫、騎士という役割がある。

国王は国の政治を。

姫は国民の象徴として。

騎士は国王と治安を守るため、と分担されている。

そんな国のお姫さまが、何故普通の学生に？
という疑問を皆考えていたのだ。

そして、ティナから返ってきた答えはクラス全員の予想を遥かに超えた返事だった。

ティナ

「マスターに会いに来たんです。私」
さらりとすごい事を言った様な気がする。

マスターは驚きを隠せない表情でティナを見ている。

クラス

『何iiiiiiiiっ！？』その声でクラスのガラスが割れるんじゃないか？と思える程の大音響が学校に響いた。

マスター

「だゝかゝらゝ！たまたまだっつの！信じろ！」
クラスの男子に囲まれるマスター。
その隣にはティナが座っている。

ロイ

「…たまたまで普通知り合いにはなんぞ？」

マスター

「ホワタッ！！」

マスターがすかさずロイに裏拳を入れる。

マスター

「はあゝゝ…。…！スロウド！」

スロウド

「ホワイ！突然何！」

スロウドの机を叩き、マスターが鬼気迫る顔でスロウドに顔を近づける。

マスター

「他のクラスに！例えば三年とかに転校生来てるって情報！あるか？！」

突然焦り出すマスター。その顔が微妙に恐怖で引きつっている。

スロウド

「えゝと…確か…」

指をクルクル回し、思い出し始めた。

スロウド

「…あ！確か三年生にもう一人…」

マスター

「だあああっ！もっっ！」

頭を抱えて絶叫するマスターを驚いた顔で見るスロウド。
突如、ロンに向きを変え、かなり早口で

マスター

「ロン！三年のやけにスタイルが良くて蒼髪の綺麗な女子に俺の事を聞かれても絶っつ対に場所言っなよ！いいな！わかったな！わかっただろ！わかったら俺は全力で逃げるからな！」

…とか言いながら教室をもの凄いスピードで走り去った。

その直後、教室にマスターの言っていた、やけにスタイルが良くて蒼髪の綺麗な女子がやって来た。

見た所三年のようだ。

???

「あれ？マスターここだと思ったのになあ？」

どうやらマスターを捜しているみたいだ。

???

「ん〜。あ！君！碧のポニーテールの子！」

ロン

「え？俺ですか？」

何故かロンが指名された。それを茶化す男子達を無視し、改めて女性を見る。

見た所かなりの美人、整った唇に、吸い込まれそうな瑠璃色の瞳。スタイルは判りやすく言っと、ボン！キュッボン。

つまり、出るところはでているある意味女子の理想の体型だった。

???

「そう、あのさあ？マスター知らないかしら？確かここだと思ったんだけど…」

ロン

「アイツなら、俺は鳥になる！って言っでどっか行きましたよ？」
その事を聞いた女性が妖しく微笑む。

???

「ふん…？あの子ったら、私から逃げられると思っているのかしら？」

ロン

「あの…。ちなみにマスターとはどういった関係ですか？」
???

「ん？見て分からないかしら？姉弟よ？」

ロン

「…へ？」

今日は驚きっぱなしの始業式だった。

一方逃げたマスターは？

マスター

「ふう…ここなら大丈夫だろう…。流石にここまで追っては…」

リンファ

「お兄さん♪」

背後から突然声をかけられた。

マスター

「どわあっ！」

リンファ

「きゃあっ！」

同時に驚く二人。

マスター

「…ビックリしたあ…」

リンファ

「私もです…」

後ろにはリンファが尻餅をついていた。

マスター

「あ…悪い。驚かせちゃって…」

リンファ

「いえ、私もごめんなさい、突然声をかけたりして」
マスター

「……って、ちょっと待った……」
マスターが悩むような仕草をした。

マスター

「……どうやって俺の場所を知ったんだ？」
確か全速力で教室をでたような気がする。

リンファ

「簡単です。追い掛けて来たんですよ？」

マスター

「……はあ！！？？」

思わずすっとんきょうな声を出してしまった。

リンファ

「……？どうかしたんですか？お兄さん？」
首を傾げて聞いてくる。

マスター ↑百メートル8秒台

「……随分……足速いんだな……リンファは……」

リンファ

「はい♪足には自信ありますから！」
元気な返事が返ってきた。

リンファ

「あ、それとお兄さん」

思い出したように後ろを指差した。

リンファ

「後ろにお姉さん居ますよ?」

冷や汗を流しながら、油の切れた機械のようにゆっくりと後ろを向くマスター。

そこには自分の姉が立っていた。

姉

「はあゝいゝマスター? 元気にしてる?」

マスター

「ぎゃああああっ!」

悲鳴じみた声を出すマスター。

姉

「何よう。私の事を化け物みたいに……」
傷ついてしまったようにいじけてしまった。

マスター

「化け物の方がマシだ! 何でいるんだよ!」
マスターのその一言で姉の態度が豹変する。

姉

「ふゝん? 言うようになったじゃない? マスター……」
そう言うのと、頭を鷲掴みにし、力を込める。

マスター

「いだだだだっ!! マジ痛いって!」
マスター 現在万力され中です……。

マスター

「……………」

こめかみを押さえ、膝を着くマスターに、姉が容赦無い一撃を加える。

姉

「追い討ちは基本よね？」

延髄辺りに踵落としをしようと足を振り上げる。

マスター

「…姉貴？スカートの中丸見え…」

姉

「別に構わないわよ？」

振り上げた踵を容赦無く振り下ろす。

バキッ！

マスターの首の辺りからやけに鈍い音が聞こえた。

姉

「だって別にマスターに見られても困らないもの」

スカートの端を持ち上げて、マスターに見せる姉のフィリア。

リンファ

「…お姉さん…少しはしたないですよ…」
頬を赤らめて、リンファが遠慮がちに注意する。

フィリア

「大丈夫よ。リンファちゃん。ちなみに今日は水色と白の縞パンよ？」

リンファ

「い、言わなくていいですう……（赤面）」
更に顔を赤らめるリンファ。

首を押さえながらマスターがようやく立ち上がる。

マスター

「いたたた…。変わらんなあ…姉貴は…」
やれやれといった表情で首を振る。

フィリア

「当たり前よ。…マスターは前に比べて随分男らしくなったみたいね」

リンファ

「お兄さんの昔、見てみたいです」

マスター

「今と変わらんぞ？リンファ。なあ姉貴？」

フィリア

「そんな事無いわよ？」

諦めたように溜め息を吐きだすマスター。

マスター

「全く…姉貴には勝てないな…いつになっても…」

フィリア

「ふふ、当たり前じゃない？私はマスターの姉なんだから」
そう言って抱きつくフィリア。

マスター

「やめい！離れい！暑かしい…」

フィリア

「照れない照れない♪」

マスター

「照れてないっ！」

そんな二人のやり取りを見て、リンファが疑問に思ったのか、聞いてくる。

リンファ

「いつもこんな感じなんですか？」

その疑問に答える二人。

フィリア

「ん？昔からよ？」

マスター

「昔からこうなんだ」

そう、一連の出来事全てがマスターとフィリアにとっては普通なのだ。

マスターから離れ、リンファの隣に並ぶフィリア。

フィリア

「マスター？これからもよろしくね？」

リンファ

「私ですよ？お兄さん」

二人がよろしくと言った感じで改めて挨拶をしてくる。

マスターは頭を掻きながらぼやく。

マスター

「はぁ……これからの学校生活、一体どうなるんだかな？」

春に相應しい、暖かく、柔らかな風が頬を撫でた。

マスター

「……あ、そういえば」

フィリア

「ん？どうかした？マスター」

リンファ

「お兄さん？どうしたんですか？」

マスター

「…いや、何でもない」

かぶりを振り、踵を返すマスター。

マスター

（ティナを忘れてたなあ…）

そんな事を考えつつ、ドアノブに手をかけて回し、ドアを開けて教室へ戻ろうとするマスターの後を、フィリアとリンファがついてきた。

教室に戻ると、すぐにHRが始まった。

第一章 ある意味の悪夢（後書き）

一話一話が長くなります。駄文ですが、ここからよろしく願います。
読んだら感想お願いします。
無いと凹みます。マジです。

第二章 夜の姿と彼らの仕事（前書き）

書くのに時間がかかり過ぎました。すいません。

第二章 夜の姿と彼らの仕事

フィリア

「マスター？まだ出来ないの？」

今は晩ご飯の時間。

家に着くとすぐにフィリアが、

「お腹空いたからマスター何か作ってー」

と、ワガママを言い出した。

マスター

「もう少しで出来るから。あ、リンファその皿取ってくれ」

リンファ

「これですか？」

キッチンの脇に皿が置かれる。

マスター

「サンキュー」

フィリア

「まだ出来ないの？」

マスター

（姉貴は見てるだけかよ！手伝えや！）

などと思うが声には出さない。

言ったら殺されるから。

……それから数分後。

マスター

「ほい、完成つと！」

次々とテーブルに料理を並べていく。

二人

『……………』

まじまじと料理を見つめるリンファとフィリア。

（……………何かしましたか？俺）

二人

『……………』

（……………聞いてみるか）

マスター

「あゝ…二人共？何か料理に不満でも？」

リンファ

「…お兄さん」

フィリア

「マスター…？」

マスター

「…何？」

（何だ何だ？二人揃って？俺は料理に毒なんて入れないぞ？）

だが、返ってきた返事は予想外なものだった。

二人

『いつもこんな手の込んだ料理作ってるの？』

マスター

「……何だ、そんな事か」

（安心した。てつきり料理に不満でもあるのかと思ったじゃねえか）

軽く鼻の頭を掻きながら、料理の説明をする。

マスター

「今日から姉貴と、リンファの二人と暮らす事になったから、せめてもの歓迎って事で今日は特別にしましたって訳だ」
誇らしげに胸を張るマスター。

だが…。

フィリア

「それは…分かったけど…」

リンファ

「ちよっと…多いです」

何しろ、テーブルを埋めつくさんとばかりに並ぶ料理の山。

さすがに女二人に男一人の計三人で食べきれんかは難しかった。

マスター

「何も全部食べるとは言わないさ。明日の弁当の分もまとめて作ってるしな。当然三人分」

——でないとこんなに作らないっちゅうに…。

リンファ

「へー…ちゃんと考えて作ってるんですね？お兄さんは…。…？」
ふと、料理を見たリンファが首を傾げた。

フィリア

「明日のお昼が楽しみね♪って…。あら？」
フィリアもリンファと同じように首を傾げた。

マスター

「どうした？髪の毛でも入ってた？それともどっか焦げてた？」

二人

『何で私の好きな食べ物ばかり？』

——…初対面だよなあ！何でそんなによくハモるのか俺疑問で仕方ないんだけど！

それはともかく、疑問に答えるマスター。

マスター

「どうやって知ったか… だろ？ 答えは簡単さ」
まず、フィリアを指差す。

マスター

「自分の姉の好きな食べ物ぐらい覚えてるのは当たり前だろ？」

フィリア

「まあ… そうだけど…」

マスター

「リンファのは、憎たらしい事に親父から電話がかかってきたから知ってるって訳だ」

リンファ

「憎たらしいって…」

マスター

「つまり、小さな親切、大きなお世話な事をしやがったんだよ…！
あのくそ親父は…！！」
恨みを込めて拳をわななすマスター。

二人

『…………… (汗) 』

二人は、何故こんなに親子の仲が悪いのかを気にしたが、怖いので聞かない事にした。

マスター

「ま、置いといて。さっさと食べるか」

フィリア

「そうね。冷めるとまずくなるし」

リンファ

「早く食べたいです…」

マスター

「リンファ…よだれ…」

リンファ

「ひゃうーっう…」

フィリア

「ふふ、それじゃ、食べましょうか」

マスター

「だな、それじゃ…」

三人

『いただきます』

三人

『ご馳走さま』』

そして、すぐに片付けに入る。

三人でやったため、あっという間に終わった。

食後のリラックスタイム中に、マスターの携帯が鳴った。

マスター

「はい、もしもし？」

電話の相手はスロウドだった。

スロウド

「あゝマスター？ロンから伝言な」

マスター

「ああ…何？」

スロウド

「仕事だとよ。後…」

マスター

「まだあんのかよ…」

スロウド

「遅刻するな、だとよ。オマケでも一つ…」

マスター

「今度は何だ！」

スロウド

「ロイが、馬鹿だつてさ……」

マスター

「……後で殴つとく」

スロウド

「誰を？」

マスター

「もち、お前だ！」

そう言つて電話を切つた。

フィリア

「マスター？仕事つて……何かしら？」

マスター

（はうあっ！）

ヤクザも裸足で逃げ出しそんな殺気を背後から感じる。

フィリア

「そうね……夜にやる仕事つて言えば……」

マスター

（考えんなや！つつか、ほつとけ！）

思いついたように、手を叩く。

フィリア

「ホストとか！」

マスター

「違う、全然違う。世界がひっくり返っても違う！とにかく、俺は出かけるからな！」
靴を履き、すぐに外に出ていくマスター。

彼らの仕事が始まった。

マスター

「はあ…誰も居ないよな」
街には誰も居なかった。

本来、この時間―夜―に出掛ける人間はこの国には『居ない』。

――三百年前。世界中にモンスターを作り出した黒い気体―瘴気―が一つの大陸を飲み込んだのが原因だ。
瘴気は気体の状態から、心臓を作る。
その心臓が更に瘴気を取り込むと、モンスターとなる。
しかも大量に吸い込むと、死に至る。

マスター

「…モンスターもわざわざ夜に活発にならんでもいいのにな…」

ロン

「無茶言ったって」
いつの間にかロンが後ろから憑いてきていた。

マスター

「スロウド＆ロイは？」

ロン

「さあ？まだじゃねえの？」

二人である場所を目指し、歩く。

着いた場所は、路地裏にある、とある店だった。

店の看板には、『不死ノ不知火』と書かれている。
扉を開け、中に入る二人。

マスター

「…いい加減換金したほうがいいよな…」

ロン

「…同感だ」

店の中には、紙の山が所狭しとそびえていた。

——その紙の山は全て仕事をこなしたという証の、依頼書である。

彼ら四人は、条件付きの何でも屋、依頼屋をやっている。

仕事は至って簡単。

仕事を貰い、働き、報酬を受け取る。といった感じだ。

だが、仕事の内容は命懸けのものが九割を占めている。

彼らは学校に内緒で仕事をしているのだ。

マスター

「期限切れの奴って、あったっけ？」

ロン

「っと…確か…そこら辺だったかな？」

クローゼットの辺りにある依頼書の山を指差す。

マスター

「んじゃ、後で焼くか」

ロン

「他のは換金だな」

そこに、スロウドとロイがやってきた。

スロウド

「やつほゝ久し…」

マスター

「フンッ！」

スロウド

「グハッ！！」

マスターの右ストレートがスロウドの顔面に直撃した。

ロイ

「…よ。相変わらず汚いよな、ここは」

マスター

「まあ、片付けて無いしな、最近」

スロウド

「復か…！」

マスター

「黙れ！」

スロウド

「ぶばあっ！」

ロン

「…全員いるから、依頼の話していいか？」

マスター

「ああ、いいぜ」

ロイ

「（無言で頷く）」

ロン

「じゃあ、言うぞ？」

一枚の紙をロンが読み上げる。

ロン

「今回はモンスター退治だな」

マスター

「数は？何匹だ？」

ロン

「ん…とりあえず、見かけしただとよ」

ロイ

「…報酬は？」

ロン

「あゝ…数に応じて支払い致します、だとよ
以上、と言いつつ紙をまるめるロン。」

マスター

「んじゃ、各自準備出来しだいまとまって行動しようぜ」
そう言つと、店の奥の扉に開けて消えた。

ロイ

「…早くしろ」

ゲシィッ

スロウド

「べぶらあっ！うっ…了解」

ふらふらと立ち上がるスロウドの首根っこを掴み、引きずりながら
別な扉を開けて消えるロイ。

ロン

「俺も準備するか…」

そして、四人はそれぞれ着替え始めた。

マスター

「…さて、と」

部屋にはロッカーとベッドがあり、クローゼットは開けっ放しでその中には刀剣類が所狭しと立て掛けられていた。

マスターは上着を脱ぎ、ロッカーを開ける。

その中には黒のロングコートが入っている。

服の所々には輪が着いている。

そのコートを手に取り右腕を通し、続いて左腕を通す。

その後、クローゼットに向かい、腕を組み、悩む。

マスター

「今回は…面倒くさいからいつも通りでいいや」

まず手に取ったのは刀だった。

それをコートの腰辺りに着いている輪に通し、もう一本を対になるように通す。

更に、両刃剣二本を手に取り、後ろ腰辺りに着いている輪に二本同時に通す。

マスター

「…一応持っていくか」

最後に大剣を手に取り、右肩の後ろ辺りの輪に通し、準備完了だ。

そして、またロッカーに向かい、手袋を手取る。

それを両手にはめながら扉に向かう。

手袋は指先が出ていて、指が自由に動く様になっていた。

マスター

「あいつらもういるかな？」

扉を開けると、既にロンがソファー辺りに立っていた。

ロンは何も持っていない、つまりは丸腰の状態で立っていた。

まあ、武器は体術だから別に構わないのだが。

マスター

「何度見ても軽そうな格好してるよな、お前」

ロン

「お前は相変わらず重そうな格好してるな」

二人が黙っていると、スロウドとロイが別々の扉を開けて入ってきた。

スロウド

「おっ待たせ〜」

ロイ

「…悪いな、待たせたか？」

マスター

「…お前ら、本っ当に性格逆だよな」

スロウドは、両腰にショットガン二丁をグリップをこちらに向ける様に腰に差していた。

そして、それに向かい合うようにハンドガン二丁を腰に差し、後ろ腰にはグリップを外側にし、上に向けてサブマシンガン二丁を差していた。

一方ロイは交差させるように、槍を二本背中中に差していた。といつてもただの槍ではない。

それを確認したマスターは、一度ため息を吐くと、外に出る扉まで歩き、手を掛ける。

そこで一度首だけでこちらを向き、一言。

マスター

「んじゃ、行くか。仕事しによ」

三人は黙って頷く。

何故なら準備は既に出来ているからだ。

それを確認したマスターは軽く笑みを浮かべ、扉を開けた。

夜の街には月明かりが満ちていて、何処か幻想的な風景を感じさせた。

そして、四人は街に潜む異形の者達を狩るために夜の街へと駆り出した。

マスター

「まずは、二人二人に別れよう、待ち合わせはここで良いか？」

今、四人は公園に来ている。
そこを公園と呼べるかは怪しいが。
何せ、ベンチと木しかないのだから。

マスターの提案に頷く三人。

ロン

「ま、確かに群れて行動するのは面倒だしな」

スロウド

「なら俺はロイとか？」

ロイ

「…ま、それが確實だな。機動性に優れているから奇襲には最適だ」

ロン

「俺はマスターとかよう…」

不満そうにするロン。

そして、別れようとした時にスロウドが気楽そうな声である提案をした。

スロウド

「あれやらねえ？ただやるのもつまらないし」

ロン

「アレ？どうする？マスター」

マスター

「ん？別に構わないけど？スロウドの言つとおり、ただやるのもつまらないしな」

ロイ

「…めんどくさいな…」

何かロイが呟いているが気にしない。

アレとは、名付けて『ノルマクエスト』の事である。

ルールは簡単。

ノルマを達成すれば報酬はそのまま貰える。

だが、ノルマを達成出来なければ報酬をその分他のメンバーに割り振るというゲームみたいなものだ。

そして、それぞれが行動を開始した。

マスター

「よっ、と」

電信柱の上を飛び移るマスター。

それにロンも付いてくる。

ロン

「居たか？マスター」

背後を振り向かずにマスターは答えた。

マスター

「居ないけど、そろそろ団体さんに会えそうだ」

そして、マスターの言つとおり団体に出会った。

数にして約五十。

二人は地面に降り、武器を構える。

マスターは両腰の刀を抜き、腕を下ろした状態で構える。

ロンは左肩を相手に向け、右腕を腹の前で握る構えを取る。

モンスターはすぐにこちらに気付き、雄叫びを上げた。

マスター

「全く！ そんなに急かすなよ！」

マスターは迎え撃つ様に刀を構える。

ロン

「確かに、すぐに終わらす！」

ロンは拳を握り直し、睨み付ける。

マスター

「せいっ！はあっ！」

右手の刀を左から右へ振るう。

隙を与えずに左手の刀を縦に振り下ろす。

すぐに二体を撃破、その後は身体と刀を回転させながら敵を斬って進む。

ロン

「ふっ！せい、はっ！」

目の前の敵を右手で殴り、左足の上段蹴りで吹き飛ばす。

更に来るもう一体は、身体を回転させて威力を上げた右足の後ろ回し蹴りで撃破する。

次々と突っ込んでくるモンスターを体術で薙払いながら進むロン。

二人はすぐにモンスターの群を蹴散らした。

マスター

「さて…次行くぞ、ロン。…危なっ！」

マスターの顔面スレスレをロンの渾身の右フックが擦っていく。

その拳は明らかに殺意が込められていた。

ロン

「次行くぞ、じゃねえよ！お前何回俺を斬りそうになった!？」

マスター

「三十二回」

平然と答える。

それを聞いたロンは当然激怒した。

ロン

「分かってんのかよ！死ねえ！」

マスター

「うおわっ！」

今度は顔面スレスレを回し蹴りが通り過ぎる。

二人は何故か喧嘩しながら移動していった。

一方、別れた二人は…

スロウド

「ひいやああああ！」

ロイ

「（無言でダッシュ）」

モンスターの大量を背後に引き連れながら街の中を走り回っていた。

事のいきさつはこうだ。

まず、スロウドは高層ビルの屋上からモンスターを狙撃していた。その下ではロイがモンスターと戦っていた、までは良かったのだが、すっかりスロウドが銃を落とし、モンスターの大群の真ん中に落ちた（最上階から）。

そして、ロイの居る方向に猛ダッシュ。

ロイの相手していたモンスターが数倍に増え、結果的には二人揃って逃げている。

スロウド

「と、いうわけなのだよ」

話し終えたスロウドが、何故か誇らしげにしている脇には、横目で睨むロイの姿がある。

ロイ

「……………馬鹿が」

殺意満点でロイが呟き、更に走る速度を上げた。まるでスロウドを置いていくかの如く速度で。

スロウド

「待ってくれー！」

緊張感の欠片も無い叫びが聞こえるが、ロイは無視していた。だが、スロウドは一向に離れない。

一定の距離を保ちながら追いかけてくる。

さながらストーカーである。

ロイ

「…ん？」

先頭を走るロイが、ある人物達を見つけた。

死闘を繰り広げる、青と翠。

拳と刀が何度も打ち合っているが、どちらも譲らない。

ロイはここぞと言わんばかりに二人に向かって突撃する。
突然の乱入者に気付く二人。

ロイ

「…どうにかしてくれ」

マスター

「もう少し待ってくれ！今良いとこなんだ！」

テレビの途中を見たがる子供の様な返答が返ってくるが、ロイはまたも無視していた。

ロン

「って！何だよ！あの数は！」

背後に迫る大群にロンが気付いた様なので、スロウドは

「助けてくれ」

と、全く危機的状況を感じさせない声で助けを求めた。

マスター

「はあ…まあいいか、ロン！」

マスターは矛先をスロウド、及び、モンスターに向けた。

ロン

「あいよ！了解！」

同じくロンも、スロウドとモンスターの大群に向けて構えを取る。

それを見たロイは後ろを向き、大きく後ろに跳び、マスターとロンの間に着地し、槍を二本構えた。

スロウド

「へ？ちよつと…冗談だよね？まさか俺ごと薙払うつもりじゃないよね？」

ロイは笑っているが、顔は青ざめていた。

三人は不敵な笑みを浮かべると、武器を振りかぶる。

スロウド

「ぎゃあああああつ！マジですかあああああつ！？」

その夜、スロウドは空高く宙を舞った。

マスター

「さて、これくらいか？」

ロン

「だといいな、そろそろ時間だし」

ロイ

「…ノルマは全員クリアしたしな。早く戻るぞ」

スロウド

「……………」

ボロ雑巾の様なスロウドが三人の去っていく夜の道路で倒れていたが、三人が見えなくなった後。

スロウド

「復活！……あれ？何？俺一人？」

高々と天に突き出した拳を引つ込め、一人虚しく店に戻った。

店に戻ると、いつも通りの三人が何ら悪びれた様子も無く、スロウドの心配をしてきた。

マスター

「どうした、スロウド！？誰にやられた…ぷっ」

心配しているようだが、顔が笑っていた。

ロイ

「お前がそこまでやられるとはな…今回の依頼はかなり難易度が高かったみたいだな…ふっ」

口を手で抑え、必死に笑いをこらえている。

ロン

「あんまりいじめんなって、ほら、報酬」

唯一まともだったのはロンだけだった。

スロウド

「うっ…なんか惨めな気分」

何はともあれ、四人は無事に帰ってきた。

時計の針は、午前三時を知らせようとしていた。

時間なので四人は店の戸締まりをしつかりとし、最後にマスターが鍵を閉め、解散した。

散り散りになる四人の内、マスターを見つめる一人の男が居た。

???

「…随分と元気そうだな、マスター？」

男は口元に怪しい笑みを浮かべると、マスターに聞こえない程度の声で呟いた。

???

「さあ、始めようじゃないか」

男の後ろには黒い鎧で全身を包み、逆手に眼の付いた大剣を構えるモンスターが立っていた。

左半分は黒いマントで隠されている。

???

「シュナイダー、身体の調子はどうだ？」

シュナイダーと呼ばれたモンスターは、答えない。

???

「…まだか？」

質問形式で聞いてみる。

シュナイダー

「…ああ、まだだ。身体が完全では無い」

マントに隠されている左腕を動かす。

マントで浮かび上がった左腕は、人の腕をしていなかった。

口のような物が魂を求め、蠢いていた。

同様に、彼の左肩もだった。

大きく突き出した左肩、牙が隙間無く閉じられている胸の鎧。それだけで充分に異様だった。

何よりも、爬虫類を彷彿とさせる様な小さい眼が、兜の、人の目が本来ある位置にあった。

それ以外の空間は、黒一色だった。

???

「何が足りない？」

男は全身が闇で彩られているかの様な黒さを纏いながら聞く。

シュナイダー

「……人の、魂だ」

男は歪んだ笑みを浮かべると、シュナイダーを連れて消えた。

始まったのである。

彼の、マスター・ハーベルグの。

果てなき、闘争が。

まだ、彼は気付いていないだけである。

だが、気付いた時には全てが遅い。

これは、運命に逆らえないと知りながらも抗う、一人の青年の物語……。

第二章 夜の姿と彼らの仕事（後書き）

さあ、これから始まります。

お付き合いし

て頂ければ幸いです。

…毎回言ってる気がします

が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1438b/>

鳳凰煉獄～焰の剣～

2010年10月21日22時36分発行